

原 著

簡易版東アジア圏域用老親扶養意識測定尺度の開発

實金 栄^{*1}, 太湯好子^{*1}, 桐野匡史^{*2}, 竹田恵子^{*3}, 高井研一^{*1}, 中嶋和夫^{*2}

要 約

本研究は、東アジア圏域3カ国（日本、韓国、中国）に共通して使用できる簡便な老親扶養意識に関する測定尺度の開発をねらいとし、東アジア圏域3カ国の大学生ならびにその親のデータを基礎に、「手段的援助」と「情緒的援助」のそれぞれが4項目から構成される簡易版東アジア圏域用老親扶養意識測定尺度の構成概念妥当性について、因子構造の側面から検討することを目的とした。東アジア圏域3カ国の大学生とその親に調査を行い、日本の大学生758人とその親409人、韓国の大学生486人とその親495人、中国の大学生873人とその親623人の計3644人を分析対象とした。老親扶養意識を手段的扶養意識（4項目）と情緒的扶養意識（4項目）の2因子斜交モデルを設定し構成概念妥当性を因子構造モデルの側面から検討した。この2因子斜交モデルのデータへの適合度は、統計学的な許容水準を満たしていた。さらに日本、韓国、中国の3カ国と、大学生とその親で分割した6群のデータにおいて同時因子分析により検討したところ、因子負荷量が群間で等しいという制約を課した測定不変のモデルにおいて、適合度は統計学的な許容水準を満たしていた。この結果は簡易版東アジア圏域用老親扶養意識測定尺度の因子構造モデルの側面からみた構成概念妥当性が支持されたことを意味する。次いで簡易版東アジア圏域用老親扶養意識測定尺度の信頼性の検討をCronbach's α 信頼性係数から検討した。結果は手段的扶養意識は0.867、情緒的扶養意識は0.853であり信頼性は支持された。以上の結果より簡易版東アジア圏域用老親扶養意識測定尺度は、東アジア圏域3カ国における老親扶養意識の違いやその変化を踏まえた老親扶養システムを検討する上で、重要な機能を果たすものとして期待できる。

1. 緒論

近年、東アジア圏域に位置する3カ国（日本、韓国、中国）は経済発展に伴う医療等の充実を背景に平均寿命は伸び、老年人口割合が急速に増加している。他方、経済発展に伴う労働力移動は、若年人口の都市への集中から子どもが家を離れ、核家族化を招いている。また、女性の社会進出に関連して、家族の介護力の低下をきたしている。従来、東アジア圏域3カ国では、儒教思想による「孝」に基づく社会規範、あるいは法制上に老親扶養に家族が位置づけられ、家族により老親の扶養がなされてきた。だが、そのような老親扶養の意識は変化しつつあることが知られている。日本では今後さらに老年人口の増加が見込まれ、また韓国、中国においても日本より短い期間で老年人口割合が増加すると推測¹⁾されている。このことを勘案するなら、老親扶養システ

ムをどのように構築するかは東アジア圏域3カ国に共通した喫緊の課題と言えよう。この課題に取り組むにあたっては老親扶養意識の把握や関連要因ならびに変容過程を十分に把握する必要がある、老親扶養意識の変化のプロセスを実証的に検証することが重要である。

欧米ではSchorr²⁾が老親扶養を老親の基本的ニーズに応える子の義務と定義し、老親扶養に関する研究はCicireli³⁾らを始め数多く知見が蓄積されている^{4,5,6)}。日本においては那須⁷⁾が扶養する主体の違いにより「私的扶養」と「公的扶養」に分類し検討を加え、「家族的扶養」は「私的扶養」とされ、その内容は金銭や物質による「経済的扶養」と老人の心身の条件に応じた身の回りの世話や病気の看護による「サービス扶養」の二つを下位概念としている。また森岡⁸⁾によれば、高齢者の主な欲求を「経

*1 岡山県立大学 保健福祉学部 看護学科 *2 岡山県立大学 保健福祉学部 保健福祉学科

*3 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 保健看護学科

(連絡先) 實金 栄 〒719-1197 岡山県総社市窪木111 岡山県立大学

E-Mail : mikane@fhw.oka-pu.ac.jp

済欲求」「身体欲求」「関係欲求」「価値欲求」とし、この諸欲求の充足を支援する行為を老親扶養とし、経済欲求の充足に関する「経済的援助」、身体欲求の充足に関する「身辺介護」、関係欲求の充足に関する「情緒的援助」を重要な構成要素と位置づけている。ただし、価値欲求の充足への援助は、自立的自助的分野に属することから家族的援助も間接的な意義しか持たないとして扶養から排除している。このような老親扶養意識に関する測定尺度としてSchorr²⁾らにより「老親扶養義務感尺度」が開発されている。しかしながら欧米と異なる儒教思想を背景とする東アジア圏域で生活をしている人々では、文化的背景や価値観が異なることが予測されることから、東アジア圏域で生活する人々を対象とした老親扶養意識を測定する尺度が必要とされ、日本では太田⁹⁾らが森岡の扶養の側面をもとに「経済的援助」「身体的介護」「情緒的援助」の3因子11項目からなる老親扶養義務感尺度を作成し、親密度尺度¹⁰⁾との関係において基準関連妥当性を検討している。しかし、本尺度は日本のみの30歳代女性のデータをもとに開発されたものであり、また他にも扶養意識の測定尺度^{11,12,13,14)}がいくつか認められるものの、すべて日本のデータにのみ依存した尺度であり、尺度の構成概念妥当性には限界があることは認めない。それに比して、尹ら¹⁵⁾は日本と韓国のデータにより東アジア地域用老親扶養意識測定尺度の開発を行っている。この尺度は「経済的援助」「身体的介護」「情緒的援助」が扶養に含まれるとし、上記の3因子に関連する15項目の調査項目を設定し、構造方程式モデリングにより解析し、「手段的扶養意識」と「情緒的扶養意識」の2因子斜交モデルとして因子モデルを構造化することが望ましいこと、加えて「FACESⅢ Assessment¹⁶⁾」に含まれる家族の「凝集性」により基準関連妥当性も検証している。しかし、尹らの尺度には東アジア圏域3カ国のうちの中国データが含まれていない。

そこで本研究では、中国を含めた東アジア圏域3カ国に共通して使用できる簡便な老親扶養意識に関する測定尺度の開発をねらいとして、東アジア圏域3カ国の大学生ならびにその親のデータを基礎に、「手段的援助」と「情緒的援助」のそれぞれが4項目から構成される簡易版東アジア圏域用老親扶養意識測定尺度の構成概念妥当性について、因子構造の側面から検討することを目的とした。

2. 研究方法

2.1. 調査対象

調査対象は、日本、韓国、中国における大学生と

その親とした。大学はいずれの国においても男女の構成を考え、2大学を対象とした。日本は大学生772人とその親414人の計1186人から回収し、欠損値を除いた大学生758人とその親409人の計1167人を分析対象とした。韓国は大学生505人とその親505人の計1010人から回収し、欠損値を除いた大学生486人とその親495人の計981人を分析対象とした。中国は大学生878人とその親637人の計1515人から回収し、欠損値を除いた大学生873人とその親623人の計1496人を分析対象とした。合計3644人を分析対象とした。なお、大学生の有効回答率は日本98.2%、韓国96.2%、中国99.4%であり、また親は日本98.8%、韓国98.0%、中国97.8%であった。

2.2. 調査内容

質問紙は韓国、中国の研究者が韓国語、中国語に翻訳し、次いでその翻訳をもとに日本語へのback translationを行い韓国語版、中国語版を作成した。その後再度協議をし3カ国の質問内容に統一性を持たせ完成した。調査内容は、基本属性と老親扶養意識とした。

2.2.1. 基本属性

基本属性は性、年齢、国とした。

2.2.2. 老親扶養意識

老親扶養意識は、尹ら¹⁵⁾が開発した東アジア地域用老親扶養意識測定尺度(12項目)を用いた。「あなたの家族に対する扶養の意識についてお尋ねします。」と提示し、回答は「0点：そう思わない」「1点：あまりそう思わない」「2点：どちらともいえない」「3点：ややそう思う」「4点：そう思う」の5件法で求め、老親扶養意識が高いほど得点が高くなるよう配点した。

2.3. 統計解析

本研究では、開発者の許可を得て、東アジア地域用老親扶養意識測定尺度のなかの手段的扶養意識の項目に関して項目削減を試みた。この項目削減には手段的扶養意識の調査項目を対象にCorrected Item-Total Correlation (CITC)と主成分分析を採用した。CITCの吟味は、同時複数項目削減相関係数法¹⁷⁾に従って行い、その数値が0.40以下の項目を削除した。次いで残った項目に対して主成分分析を適用し、情緒的扶養意識と同数の項目数となるべく、その第1主成分負荷量の上位4項目を選択した。項目数を同数にする意味は、下位概念ごとの扶養意識の比較検討を容易にするためである。

構成概念妥当性は、尹らが提示している2因子斜交モデルを仮定し確証的因子分析で検討した。次いで国(日本、韓国、中国)と世代(大学生、親)とに分割した6群のデータを用いて同時因子分析を行

い、因子不変性^{18,19)}について検討した。同時因子分析による因子不変性の強度は、step1は因子負荷量は群間で異なるが因子構造は等しいとするモデル(配置不変)、step2は因子負荷量が群間で等しいという制約を課したモデル(測定不変)、step3はstep2に加え因子の分散、共分散が群間で等しいという制約を課したモデル、step4はstep2に加え誤差分散が群間で等しいという制約を課したモデル、step5はstep2に加え因子の分散、共分散、誤差分散のすべてが群間で等しいという制約を課したモデルの5条件下で観察した。なお、分析モデルのデータへの適合性の判定には、標本数や観測変数の数に影響されにくい比較適合度指標Comparative Fit Index (CFI) ならびに適合度指標Root Mean Square Error of Approximation (RMSEA) を採用した。CFIは一般的に0.90以上、RMSEAは0.08以下であればそのモデルがデータによく適合していると判断される。分析モデルの部分評価であるパス係数の有意性は、Wald検定で検定した。検定統計量C.R.(棄却比:critical ratio)の値が1.96以上(5%

有意水準)を示したものを統計学的に有意と判断した。

また、簡易版東アジア圏域用老親扶養意識測定尺度の信頼性は、下位領域ごとにCronbach's α 信頼性係数、ならびに簡易版東アジア圏域用老親扶養意識測定尺度の手段的扶養意識4項目と東アジア地域用老親扶養意識測定尺度の手段的扶養意識8項目との相関係数で検討した。

以上の統計解析のうち、構造方程式モデリングによる解析には「Amos17.0」を使用し、他の解析には「SPSS17.0」を使用して処理した。

3. 結果

3.1. 対象者の基本属性

対象者の平均年齢は大学生では、日本20.3歳、韓国22.5歳、中国21.0歳、親では日本50.9歳、韓国50.3歳、中国47.7歳であった(表1)。性別は女性2005人(55.0%)、男性1639人(45.0%)であった。

3.2. 東アジア地域用老親扶養意識測定尺度の回答傾向 東アジア地域用老親扶養意識測定尺度の回答分布

表1 対象者の年齢分布

対象者数	日本 1167		韓国 981		中国 1496		
	大学生 758	親 409	大学生 486	親 495	大学生 873	親 623	
年齢	平均±SD (範囲)	20.3±1.34歳 (18-28歳)	50.9±4.31歳 (37-65歳)	22.5±2.19歳 (19-29歳)	50.3±5.06歳 (31-68歳)	21.0±1.52歳 (17-29歳)	47.7±4.13歳 (34-70歳)

表2 東アジア地域用老親扶養意識測定尺度の回答分布

	そう 思わない	あまり そう思わない	どちらとも いえない	やや そう思う	そう思う
手段的扶養意識					
X1. 子どもが将来の老親の経済的支援のために普段から貯蓄するのは当然である。	179 (4.9)	366 (10.0)	480 (13.2)	1041 (28.6)	1578 (43.3)
X2. 老親が日ごろ必要とするお小遣いのことで、子どもは不自由な思いをさせてはならない。	202 (5.5)	376 (10.3)	614 (16.8)	825 (22.6)	1627 (44.6)
X3. 老親が生活費に困らないように、子どもが経済的に援助するのは当然である。	124 (3.4)	221 (6.1)	428 (11.7)	956 (26.2)	1915 (52.6)
X4. 子どもは老親の病気の治療費・入院費・福祉サービス利用料を負担するべきである。	104 (2.9)	239 (6.6)	532 (14.6)	941 (25.8)	1828 (50.2)
X5. 子どもは老親に旅行や趣味活動の機会を用意してあげるべきである。	137 (3.8)	240 (6.6)	545 (15.0)	996 (27.3)	1726 (47.4)
X6. 老親が介護を子どもに要求するのは当然である。	185 (5.1)	327 (9.0)	645 (17.7)	802 (22.0)	1685 (46.2)
X7. 老親の介護を他人に任せることは、子どもなら恥ずべきことである。	542 (14.9)	774 (21.2)	804 (22.1)	734 (20.1)	790 (21.7)
X8. 老親が必要とするなら、子どもは無理してでも経済的に援助すべきである。	249 (6.8)	518 (14.2)	792 (21.7)	803 (22.0)	1282 (35.2)
情緒的扶養意識					
X9. 別居していても、老親には消息を伝えたり、聞いたりする交流を忘れてはならない。	37 (1.0)	53 (1.5)	220 (6.0)	586 (16.1)	2748 (75.4)
X10. 成人しても、子どもは老親と定期的に戻れる時間が必要である。	30 (.8)	56 (1.5)	223 (6.1)	736 (20.2)	2599 (71.3)
X11. 子どもは老親の健康状態やその変化にいつも注意してあげるべきである。	26 (.7)	58 (1.6)	207 (5.7)	727 (20.0)	2626 (72.1)
X12. 子どもは老親が困った時には、いつでも親身に相談にのるべきである。	36 (1.0)	60 (1.6)	261 (7.2)	793 (21.8)	2494 (68.4)

単位:人(%)
n=3644

は表2に示す通りである。「ややそう思う」「そう思う」を合算した回答が最も多かったのは、「X11. 子どもは老親の健康状態やその変化にいつも注意してあげるべきである」の3353人(92.1%)であり、次いで「X10.成人しても、子どもは老親と定期的に団欒する時間が必要である」の3335人(91.5%)、「X9.別居していても、老親には消息を伝えたり、聞いたりする交流を忘れてはならない」の3334人(91.5%)、「X12. 子どもは老親が困った時には、いつでも親身に相談にのるべきである」の3287人(90.2%)であり、いずれも情緒的扶養意識に含まれる項目であった。一方、「そう思わない」「あまりそう思わない」を合算した回答が最も多かったのは、「X7.老親の介護を他人に任せることは、子どもなら恥ずべきことである」の1316人(36.1%)であり、次いで「X8.老親が必要とするなら、子どもは無理してでも経済的に援助すべきである」の767人(21.0%)、「X2.老親が日ごろ必要とするお小遣いのことで、子どもは不自由な思いをさせてはならない」の578人(15.8%)、「X1.子どもが将来の老親の経済的支援のために普段から貯蓄するのは当然である」の545人(14.9%)であり、すべて手段的扶養意識に含まれる項目であった。

3.3. 簡易版東アジア圏域用老親扶養意識測定尺度における手段的扶養意識に関連した項目削減
手段的扶養意識に関する項目群の回答を基礎に

CITCを求め、その値が0.40以下の項目を削除した。その該当項目は「X7. 老親の介護を他人に任せることは、子どもなら恥ずべきことである」の1項目であった(表3)。次いで、残された手段的扶養意識の7項目で主成分分析を行い、第1主成分負荷量の上位4項目を選択した(表3)。選択された項目は、「X3.老親が生活費に困らないように、子どもが経済的に援助するのは当然である」「X4.子どもは老親の病気の治療費・入院費・福祉サービス利用料を負担するべきである」「X5. 子どもは老親に旅行や趣味活動の機会を用意してあげるべきである」「X6.老親が介護を子どもに要求するのは当然である」であった。

3.4. 簡易版東アジア圏域用老親扶養意識測定尺度の因子モデルのデータへの適合性

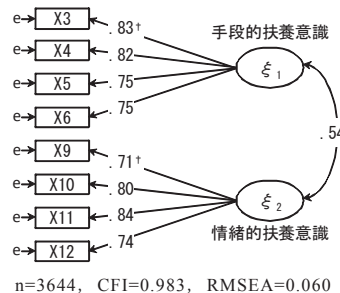
前記解析で選択された4項目を手段的扶養意識の観測変数とし、情緒的扶養意識4項目との2因子斜交モデルを設定し、モデルの適合性を検討した。その結果、適合度はCFI=0.983, RMSEA=0.060であった(図1)。因子負荷量はいずれも統計学的に有意であり、その範囲は手段的扶養意識が0.75~0.83, 情緒的扶養意識が0.71~0.84となっていた。

前記因子モデルを、国(日本, 韓国, 中国)と世代(大学生, 親)とに分割した6群のデータにおいて、同時因子分析により検討した結果は表4に示した通りであり、step4, step5のモデルの適

表3 東アジア地域用老親扶養意識測定尺度における手段的扶養意識の項目削減の検討結果

	CITC	第1主成分負荷量
X1. 子どもが将来の老親の経済的支援のために普段から貯蓄するのは当然である.	0.576	0.676
X2. 老親が日ごろ必要とするお小遣いのことで、子どもは不自由な思いをさせてはならない.	0.511	0.625
X3. 老親が生活費に困らないように、子どもが経済的に援助するのは当然である.	0.720	0.837
X4. 子どもは老親の病気の治療費・入院費・福祉サービス利用料を負担するべきである.	0.721	0.833
X5. 子どもは老親に旅行や趣味活動の機会を用意してあげるべきである.	0.659	0.777
X6. 老親が介護を子どもに要求するのは当然である.	0.719	0.814
X7. 老親の介護を他人に任せることは、子どもなら恥ずべきことである.	0.397	-
X8. 老親が必要とするなら、子どもは無理してでも経済的に援助すべきである.	0.624	0.716

注：- は主成分分析に投入されなかった項目、■は確認的因子分析に投入された項目
n=3644



n=3644, CFI=0.983, RMSEA=0.060

注1) 長方形は観測変数, 楕円形は潜在変数(因子)。ξは外生潜在変数, eは観測変数の誤差変数, 矢印上の数字は標準化係数を意味する。
注2) †はモデル識別のため制約を加えた箇所である。

図1 簡易版東アジア圏域用老親扶養意識測定尺度の確認的因子分析の結果

合度はCFIが低かった。step1, step2, step3のモデルでは適合度は統計学的な許容水準を満たしていた。step2の測定不変のモデルにおいて適合度はCFI=0.962, RMSEA = 0.030であった。

表4 簡易版東アジア圏域用老親扶養意識測定尺度における同時因子分析の結果

	CFI	RMSEA
step1	0.969	0.030
step2	0.962	0.030
step3	0.899	0.047
step4	0.829	0.057
step5	0.744	0.066

step1: 因子負荷量は群間で異なるが因子構造は等しいとするモデル (配置不変)
 step2: 因子負荷量が群間で等しいという制約を課したモデル (測定不変)
 step3: step2に加え因子の分散, 共分散が群間で等しいという制約を課したモデル
 step4: step2に加え誤差分散が群間で等しいという制約を課したモデル
 step5: step2に加え因子の分散, 共分散, 誤差分散のすべてが群間で等しいという制約を課したモデル
 n=3644

3.5. 簡易版東アジア圏域用老親扶養意識測定尺度の信頼性の検討

Cronbach's α 信頼性係数は手段的扶養意識4項目が0.867, 情緒的扶養意識4項目が0.853であった。

簡易版東アジア圏域用老親扶養意識測定尺度の手段的扶養意識4項目と東アジア地域用老親扶養意識測定尺度の手段的扶養意識8項目との相関係数は0.925であった。

4. 考察

本研究は, 東アジア圏域3カ国に共通して使用できる簡便な老親扶養意識に関する測定尺度の開発をねらいとして, 東アジア圏域3カ国の大学生ならびにその親のデータを基礎に, 「手段的援助」と「情緒的援助」から構成される簡易版東アジア圏域用老親扶養意識測定尺度の構成概念妥当性について, 因子構造の側面から, 検討することを目的に行なった。

東アジア圏域の伝統的な家族システムでは, 「孝道」が強調されている。年長者の権威が優先される社会的雰囲気醸成され, 高齢者は若い人から尊敬され, 深い知識と経験を提供し, また父母と子の関係でも孝行することを道理としてきた歴史的な経緯がある。このような孝道の体系的な強調は, 儒学に最も典型的に反映され, その方法論として「礼記」には「三孝」の中でも「最も大きな孝道は父母をよく奉養することである」と記述されている。また, 子の道理として懸命に行うべき「三孝」は「父

母に対する奉養と喪礼をすることと祭礼をすること」であるとされてきた。また, 中国古来における情緒的養老は, 具体的には, ①親の意思に従うこと, ②親を怒らせ憂得させないこと, ③礼敬を以て親に仕えることであったと指摘されている¹⁵⁾。このようなことを前提にするなら, 本調査研究で検討した老親に対する「手段的扶養意識」および「情緒的扶養意識」の因子で構成される老親扶養意識は, 歴史的にも矛盾しない概念であって, その尺度の構成概念妥当性が確認できたことは大きな成果と言えよう。他方, 従来のソーシャル・サポートに関する研究を概観すると, O'Reilly²⁰⁾は, ソーシャル・サポートの測定尺度に関連した33件の研究論文を整理し, その下位概念(因子)が, 情報による支援(informational), 情緒による支援(emotional), 手段による支援(instrumental)に集約されることを指摘している。このことから老親扶養意識に関連した著者等の用いた因子は, 「子の親に対しての, 受領ではなく, 提供に関連した情緒と手段による支援に関する意識」に該当する。

ところで, 測定尺度は, 適切な妥当性と信頼性を備えていることが必須である。通常, 妥当性は内容的妥当性, 構成概念妥当性, 基準関連妥当性の側面が重視され, 統計学的方法との関連で言うなら, 内容的妥当性は探索的因子分析による因子の抽出, 構成概念妥当性は確証的因子分析による因子構造モデルのデータへの適合性, 基準関連妥当性は重回帰分析や判別分析により予測精度の確認が課題となっている。ただし, 探索的な因子分析や多変量解析はあくまでもデータに依存した結果しか得られず, その普遍性は確証的因子分析等の構造方程式モデリングによって確認する必要がある。このようなことに加えて, 信頼性や妥当性の一側面として, 客観性, わかりやすさ, バランス, 速度, 範囲, 直線性, 信号・騒音比, 反応性, 単純性が望まれる。このうちの「反応性」は可能な限り測定している属性に影響をうけないこと, 「単純性」は, 他の条件が同じならば, 測定尺度は複雑なものよりも単純なものをを用いることが望ましいことを意味している。本研究では, この点に留意しながら, 東アジア圏域3カ国において反応性と単純性の高い簡便な尺度の開発をねらいとした。

その結果, 老親扶養意識を手段的扶養意識4項目, 情緒的扶養意識4項目で構成される斜交モデルのデータへの適合度が, 統計学的な許容水準を満たすことを明らかにした。この結果は, 簡易版東アジア圏域用老親扶養意識測定尺度の因子構造モデルの側面からみた構成概念妥当性が支持されたことを意

味している。さらに因子不変性の強度を同時因子分析により検討した結果、step4、step5において適合度指標のCFIが低かった。通常、複数の集団に同一のモデルを当てはめても全く同じ解が得られることはあり得ない。したがって制約を加えると全体としてモデルの適合度は低下する^{21,22)}とされている。しかしstep2の測定不変においては、CFI、RMSEAの適合度が統計学的な許容水準を満たすことを明らかにした。このことは国と世代とに分割した6群において、潜在変数に所属する観測変数の、概念上の一次元性が認められたことになる。つまり視点を変えるなら尺度の反応性が支持されたことになる。本研究において、日本、韓国、中国の3カ国、また大学生とその親という基準で分割した6群において測定不変が確認できたことは、今後、3カ国における老親扶養意識の違いやその変化を踏まえた老親扶養システムを検討する上で重要な機能を果たすものとして期待できよう。

次いで、本研究では、簡易版東アジア圏域用老親扶養意識測定尺度の下位概念である手段的扶養意識4項目のCronbach's α 信頼性係数は0.867、情緒的扶養意識は0.853であり、簡易版東アジア圏域用老親

扶養意識測定尺度の手段的扶養意識4項目と東アジア地域用老親扶養意識測定尺度の手段的扶養意識8項目との相関係数は0.925であり、簡易版東アジア圏域用老親扶養意識測定尺度の信頼性は支持された。よって、8項目版同様に4項目版で手段的扶養意識が測定可能であることが明らかになり、尺度の単純性が支持され、簡易版東アジア圏域用老親扶養意識測定尺度の開発は有意義であると推察できた。

以上、本研究では、東アジア圏域3カ国の大学生ならびにその親のデータを基礎に、「手段的援助」と「情緒的援助」から構成される簡易版東アジア圏域用老親扶養意識測定尺度の構成概念妥当性ならびに信頼性について評価した。今後は、本研究で開発された尺度を用い、介護の社会化、さらには扶養意識に関連する要因の解明をしていきたいと考えている。

本研究は、平成21年度、科学研究費基盤研究C（課題番号19592617、代表：太湯好子）および岡山県立大学地域貢献特別研究の研究助成による研究の一部である。

文 献

- 1) 国立社会保障・人口問題研究所、人口統計資料集2009年版、<http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Data/Popular2009/T02-18.htm>、アクセス2009/9/13
- 2) Schorr AL: Filial responsibility in the modern American family. *U.S. Dept. of Health, Education, and Welfare, Social Security Administration, Division of Program Research*, Washington, D.C., 1960.
- 3) Cicirelli VG: Attachment and obligation as daughters' motives for caregiving behavior and subsequent effect on subjective burden. *Psychology and Aging*, **8**(2), 144-155, 1993.
- 4) Finley NJ, Roberts MD, Banahan BF 3rd: Motivators and inhibitors of attitudes of filial obligation toward aging parents. *The Gerontologist*, **28**(1), 73-78, 1988.
- 5) William H Quinn: Personal and family adjustment in later life. *Journal of Marriage and the Family*, **45**(1), 57-73, 1983.
- 6) Seelbach WC, Sauer WJ: Filial responsibility expectations and morale among aged parents. *Gerontologist*, **17**(6), 492-499, 1977.
- 7) 那須宗一: 老人扶養研究の現代的意義. 那須宗一, 湯沢雍一共編, 老人家族の社会学 老人扶養の研究, 6, 垣内出版, 東京, 3-17, 1985.
- 8) 森岡清美: 地方都市高齢者世帯の居住世帯-世帯-. 季刊社会保障研究, **7**(4), 33-48, 1971.
- 9) 太田美緒, 甲斐一郎: 老親扶養義務感尺度の開発. 社会福祉学, **42**(2), (65), 130-138, 2002.
- 10) Waker AJ, Thomapson L: Intimacy and intergenerational aid and contact among mothers and daughters. *Journal of Marriage and the Family*, **45**, 841-825, 1983.
- 11) 前田大作: 大都市青年の老人観および老親に対する責任意識. 社会老年学, **10**, 3-22, 1979.
- 12) 細江容子: 親の老後に対する大学生の扶養意識. 日本老年社会科学, **9**, 96-108, 1987.
- 13) 坂本佳鶴恵: 扶養規範の構造分析-高齢者扶養意識の現在-. 家族社会学, **2**, 57-69, 1990.
- 14) 田淵六郎: 高齢者扶養と家族責任. 武川正吾編, 福祉社会の価値意識-社会政策と社会意識の計量分析-, 東京大学出版会, 東京, 113-138, 2006.
- 15) 尹靖水, 嚴基郁, 金貞淑, 黒木保博, 中嶋和夫: 東アジア地域用老親扶養意識測定尺度の開発. 評論・社会科学, **87**,

- 51-69, 2009.
- 16) Olson DH : Circumplex Model VII: Validation studies and FACES III. *Family process*, **25**(3), 337-351, 1986.
- 17) 服部環 : テストの内部一貫性を大きくするための項目選択技法. *教育心理学研究*, **39**(2), 195-203, 1991.
- 18) 狩野裕, 三浦麻子 : AMOS, EQS, CALISによるグラフィカル多変量解析 目で見る共分散構造分析. 現代数学社, 京都, 2007.
- 19) 豊田秀樹 : 構造方程式モデル 疑問編 - 共分散構造分析 -. 朝倉書店, 東京, 2003.
- 20) O'Reilly P : Methodological issues in social support and social network research. *Social science & medicine*, **26**(8), 863-873, 1988.
- 21) 古谷野亘, 柴田博, 芳賀博, 須山靖男 : 生活満足度尺度の構造 - 因子構造の不変性 -. *老年社会科学*, **12**, 102-116, 1990.
- 22) 古谷野亘, 柴田博 : 老研式活動能力指標の交差妥当性 - 因子構造の不変性と予測的妥当性 -. *老年社会科学*, **14**, 34-42, 1992.

(平成22年6月10日受理)

Development of a Simple Scale of Attitudes toward Filial Responsibility in East Asia

Sakae MIKANE, Yoshiko FUTOUYU, Masafumi KIRINO, Keiko TAKEDA, Kenichi TAKAI and Kazuo NAKAJIMA

(Accepted Jun. 10, 2010)

Key words : filial responsibility, East Asia, structural equation modeling

Abstract

In this study, we used a factor structure model to investigate the construct validity of a simple scale to measure attitudes toward filial support of elderly parents, with the aim of developing a Simple Scale of Attitudes Toward Filial Responsibility for common use in three East Asian countries (Japan, Korea, and China). A total of 3,644 university students and their parents from these three countries were surveyed. An oblique model consisting of two factors—attitudes toward instrumental support (4 items) and attitudes toward emotional support (4 items)—was established. The goodness of fit indicator for data from this model was statistically acceptable. Further investigation was conducted for the six subject groups (university students and their parents from each of the three countries). In a model of measurement invariance that constrains equal path coefficients among the six groups, the goodness of fit indicator was statistically acceptable, supporting the construct validity of the scale as a factor structure model. Next, the reliability of the scale was investigated with Cronbach's α reliability coefficient; reliability was supported with a coefficient of 0.867 for attitudes toward instrumental support and 0.853 for attitudes toward emotional support.

Correspondence to : Sakae MIKANE

Department of Nursing
Faculty of Health and Welfare
Okayama Prefectural University
Soja, 719-1197, Japan
E-Mail : mikane@fhw.oka-pu.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.20, No.1, 2010 189-195)